Vol.28

まるとみ新聞

newspaper
'13 Feb.

発行所
北九州市若松区本町 1-1-33
丸富産業（若松区役所前）
TEL093-751-1081

すまい de スマイル
13年2月号

住まいの歴史 HISTORY OF LIFE

武士は、家付きサラリーマン

「武士」のイメージといえば、「質実剛健」、凛とした立ち振舞の強者（つわもの）という感じなのですが、実のところはそうでもなさそうなのです。簡単にいうと、武士とは「家付きサラリーマン」のことで、現代のサラリーマンとそう変わらなかったようです。

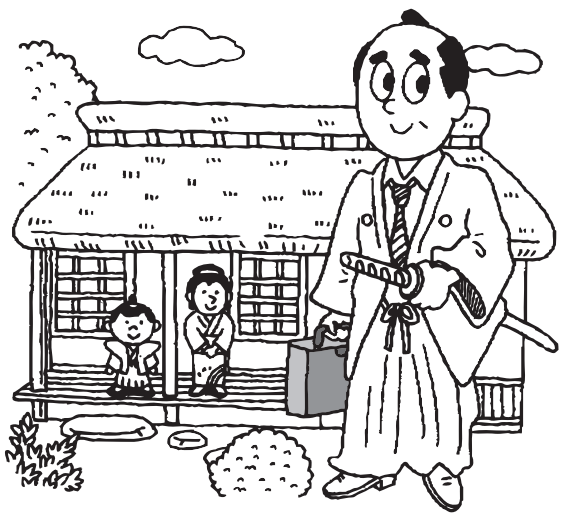
家つきサラリーマン武士の実態

そもそも武士たちが勤めていた藩、今でいう会社のようなものは、「汝らは、○○へ国替えを命じる」という幕府からの指令により領地を与えられていましたが、そこに仕える武士は、藩主から身分に応じた「家」をあてがわれていました。そのため、武士たちは、「家賃」を支払うという概念はまったくなく、平侍から、奉行になったりして出世するたびに、家を変わりました。

「武士も大変だったんだなぁ～（共感）!!」

二男、三男の生きる道は、中村主水

武士の俸禄は代々その家に受け継がれる「家禄」と、役職に与えられる「俸禄」の二種類があります。年功序列制ではなく出世すれば役録も上がりますが、そうでなければ録は退役して下がることはあっても上がることはありません。ちなみに家禄は完全世襲制ですし、役職も基本的に定員は変わりませんので録をもらえるのは長子のみです。二男、三男はうまくどこかの養子に入れればラッキー。そうでなければ一生無録で長男の居候として生きていくことになります。そういえば、ドラマ必殺シリーズでお馴染みの「中村主水」も、なんとか養子に入れた口のようで、いつも嫁姑にいびられる情けないサラリーマンという役どころでしたね。



映画「武士の家計簿」

サラリーマン武士の大変さを描いた映画に「武士の家計簿」があります。江戸時代末期、加賀藩の経理を担当する主人公が、「そろばん侍」と軽蔑されながらも誇りをもって生きていくという内容。実は、この一家の家計簿が実在していて、その見事なまでの記録が、まさに当時の武士の生き様を映していたことが映画化の要因になったようです。厳しい身分社会の中で、計算能力を生きる術としなければならない主人公。そして、その主人公に寄り添い支えていく妻。しかし主人公は藩内の権力闘争にも打ち勝ち、低い身分の武士としては異例の出世を遂げていきます。ところが、親の散財によって家計は火の車。主人公は家計の大リストラに乗り出すというのがあらすじで、ご覧になった方もいることでしょう。

トコロ変れば

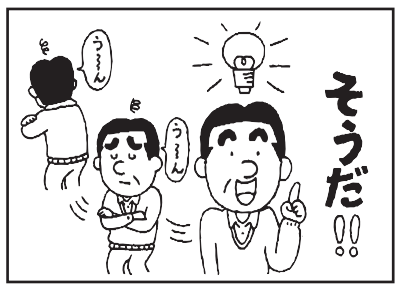
フランス

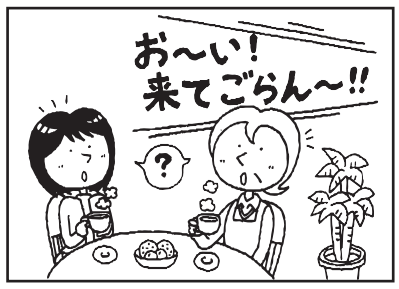
フランス式出張解錠サービス

日本流のサービスって、ホントにスゴイと思う。

部屋の鍵が開かなくて、右往左往。たまらず「鍵の○○番」などの解錠専門業者に電話したという経験、皆さんも一度くらいはあるんじゃないでしょうか。そして、現場にやってきたスタッフの高度でスピーディな技術に感嘆の声を上げた方も少なくないのでは。しかし、トコロ変わればそんな解錠サービスも驚きの実態が。話によるとフランスでは、電話して鍵屋さんがやってくるまでに要する時間がなんと3時間。しかもその仕事ぶりは、大きなバールとカナヅチで鍵を破壊だけして作業は終了。それで約2万円も取られるそうな。新しい錠前を取り付けるにはさらに別の専門業者にお願いするしかないらしいのです。しかも、スタッフはすぐには来てくれず作業にとりかかるのが数日後といいます。ということは、その数日の間、家の侵入がフリーパスになるということですよね。「365日、24時間、いつでも受付」「熟練作業員が素早く対応」「開かなかったら料金はいただきません」が当たり前の日本からしたら考えられないというか、もうありえないサービスですね。その話を聞いて、日本に生まれたことを感謝する人もきっと多いはず。ちなみに、フランスでは「鍵が壊れたなら自分で直せばいい」という考え方が一般的のようです。

すまいる家族（はればれ）





なるほど日本家屋 ～調査その⑥～

「縁側」

お寿司もエンガワが大好物です。

ウチとソトをつなぐ場所

皆さんは「縁側」にどのような印象や思い出をお持ちでしょうか。「ひなたぼっこをする場所」「お茶をすすりながら、将棋をさすところ」「夏休みに両親の実家の縁側でスイカを食べた」など、人によってさまざまでしょうが、実はこの縁側、日本家屋にだけある独特の構造なのです。

縁側といえば、家屋の縁（へり）部分に少し張り出して設けられた板敷き状の通路で、庭などから直接部屋の中に上がることができるのは、皆さんもご存知の通りです。英語では「ベランダ」や「ポーチ」とも訳されますが、玄関ではない上り口を備えてるところが、海外には例を見ない日本の縁側のオリジナリティともいえます。建築学的に見ても、こうした室内とも外部とも取れる空間があることによって、日本家屋は豊かな表情を持つことができたようです。つまり、縁側があることで外の空間と緊密な関係性が生まれました。たとえば夏には強い日差しが直接和室に入るのを防ぎ、冬にはサンルームのように空気を暖めます。この効果は縁側と部屋の境にある障子を開け閉めすることでさらに高まります。縁側は日光をうまく取り入れることで冷暖房器具に頼らずに涼や暖を家にもたらすエコ装置ともいえますね。

また障子が、向こうの人や風景を見えるような見えないような曖昧さの中に感じることができるのと同じように、内でもなければ外でもないという縁側に、空間を仕切る意識が希薄な日本家屋空間独特の曖昧さの構造を見るという専門家もいるようです。一見すると、ただ家の外側に出っ張った廊下にしか見えない縁側も、よくよく調べてみると、実はなんとも奥深い存在なんですね。

スキルアップ 稽古道

「カルトナージュ」

エレガントな小物づくりに、レッツ・チャレンジ!!

カルトナージュとは、フランスの伝統工芸のひとつで、組み立てた厚紙に布や紙を貼り、箱や小物を作る、いま話題の手づくり工芸です。その魅力は自分で選んだ素敵な輸入紙や布を貼ってオリジナルのインテリア小物を創作できるところ。ヨーロピアンなモチーフを使うのがオシャレのポイントです。製作に使う道具としては、カルトン（厚紙）、木工用ボンド、ヘラ、カッター、カッティングボードなど。ブック型のフォトスタンドやオルゴールタイプの小物入れ、手帳カバー、リネンのマガジンラック、レターセット・ボックスなど、アイデア次第でお部屋の中に自分らしい素敵な世界が広がります。